

先月号に続き、今回も琉歌の紹介をしたいと思います。

琉歌は、八・八・八・六の四句三十音の定型がほとんどで、喜びも悲しみも、また祝いの席でも三味線にのせて歌われてきました。そんな琉歌の中で、西原を歌ったものを探してみました。

ハルシラフシ  
原吉節

遊びそめなれて

立ち別る今日や

後ろとて引きゆき島の名残

読人しらず

(島の娘たちと馴れ親しんで遊んでいたものが、いざ別れるという今日は、島の名残りが惜しまれて後髪を引かれる心地がする。)

この歌は、島袋盛敏著『琉歌集』によれば、西原間切我謝村に発生した歌で首里の若者が恋人と遊んで後、その面影が忘れ難いという意とされています。

西原は、男女のアシビグ二として有名であったのか、明治四十四年十一月の『沖縄毎日新聞』の「西原だより」には、

村寄せれ寄せれ  
小那覇村寄せれ  
村ぬ寄せられみ  
アングヲ寄せれ  
とあります。

アングヲはアングワ(平民の若い娘)の意味。当時、賑やかな通りがあった小那覇は、若い男女の恋の語り場所でもあったのでしよう。琉歌では、自分の島をほめるふるさと賛歌が多く目につきますが、それとは違う一首をみつけました。

あがと西原に営みよしゆらば  
日日の音信もまれになゆら

きんちようほう  
金武朝芳

(あんな遠い西原に行って、生活をするなら、日々の訪れもこれからはまれになるであろう。)

西原は、首里から約一里、遠いという程ではないが、途中に弁ヶ岳やトーフグワ―ピラなど上り下りが楽ではないので、「あがと」といったものと思えます。

城下町として栄えていた首里の住人からすると、西原は田舎の地であったのでしよう。しかし、近代には帰農した多数の首里士族が西原に移り住むようになりました。現在では、交通の便もよく、老若男女楽しく住める町ですね。

そうそう、来月の「琉歌碑めぐり」(3/19(日)・15P参照)は、恋の歌人恩納ナベと吉屋チルーをはじめ、中部の各所を訪ねる予定です。お楽しみに。